

Four Seasons 四季 2022

関根信一

平谷 賢 (51歳 高校教師)	……	中 鳶
相庭弘毅 (52歳 「メゾン・ラ・セゾン」の大家)	……	関根信一
清水太一 (50歳 デパート勤務)	……	石 関 準
田口茂雄 (52歳 不動産会社勤務)	……	岸本啓孝
二階堂涉 (41歳 小児科医・相場弘毅の甥)	……	井手麻渡
平谷 剛 (55歳 平谷賢の兄)	……	中 鳶 聡
溝口裕也 (23歳 清水太一の同僚)	……	井手麻渡

相庭弘毅が経営するアパート「メゾン・ラ・セゾン」と彼が住んでいる家の間にある庭が主な舞台。
上手側が「メゾン・ラ・セゾン」、下手側は介護付きケアコミュニティ「ひまわり」。 「ひまわり」が建っているのは相場弘毅の実家だった場所。「ひまわり」とこの庭の間には通り抜けのできない塀がある。
正面に大きな木が一本。客席の中央あたりにある気持ち。
舞台にはいくつかの椅子。場面に応じて位置を変える。

*

*

*

第一場 春

2022年4月平日の午後。

舞台にはいくつかの椅子。

一脚は倒れている

マスクをした相場弘毅がやってくる。

倒れている椅子を起こす。

椅子に座ってぼんやりと樹を見ている。

太一がやってくる。マスクをしている。大きな荷物。

太一 ただいま。

弘毅 おかえり。

太一 ごめんなさいね、待ってた？ 新幹線、線路立ち入りとかで1時間遅れ。笹団子買ってきた。

弘毅 ありがとう。

太一 平谷くん、好きだったから、後でみんなで。

弘毅 うん。

太一 火葬は無事に済んだの？

弘毅 うん、茂雄ちゃんと平谷くんのお兄さんと僕で。コロナなんで人数できるだけ少なくて。平谷くんの同僚の先生たちは遠慮してもらって。ちよつとさびしかったかな。

太一 私もちゃんとお別れしたかったな。

弘毅 もう少し待ってもらえませんか？って言ったんだけどね。

太一 で、お骨は？

弘毅 平谷くんのお兄さんが持ってた。

太一 ええ、ここに一度もどつてくるんじゃないの？

弘毅 早く帰んなきゃいけないんだって。

太一 ちよつとどうということよ？

弘毅 それも頼んだんだけどね。

太一 ずつとこつちにいたわけでしょ。実家とは絶縁状態だったんでしょ？ なんでそういうことになるわけ？

弘毅 連絡するつもりなかったんだけど、学校から連絡行ったみたいで。こちらで葬儀はやりまして言ったんだけど、そういうわけにはいかないって、お兄さん。

太一 何よ、ずつと遠ざけてたくせに、死んだとたんに親せきヅラ？

弘毅 しょうがないよ。血縁なんだから。

風が吹く。

太一 二人とも遅いわね。

弘毅 茂雄ちゃんは、物件の立ち会いが長引いているって、渉は担当してる子の容態が急に悪くなったって。

太一 ちよつとどうということ？ みんなで話すんじゃないの？

弘毅 二人とももうすぐ来るって、連絡あった。

太一 で、どこで話す？ 平谷くんの部屋。

弘毅 勝手に入るの悪くない？

太一 じゃあ、相庭さんの部屋？ 片付けてないなら、掃除手伝うわよ。

太一、歩き出す。

弘毅 ここでよくない？ 今日はあたたかいし。部屋の中で話すの密になってよくないから。

太一 そうね。じゃあ、そうするか。ちよつと遅いけど、お花見の気分ね。（目の前にある樹を見て）この樹、桜じゃないけど。

弘毅 うん。

風が吹いて樹を揺らす。

太一 ここで話すのってひさしぶりじゃない？

弘毅 そうだね。

太一 昔は、なんだかんだ言ってイベントしてた。

弘毅 バーベキュー、流しそうめん。

太一 食べてばっかり。

弘毅 花火したよ。クリスマスもやった。

太一 平谷くん、あの樹にイルミネーション飾って。スイッチ入れたらブレーカーが落ちて。

弘毅 そうそう、やったね。十五年前？

太一 十七年でしょ。もうやだ、そんな昔なの？

弘毅 信じられない。

太一 年取るわけだわ。

弘毅 そうだ、お母さん、なんだって？

太一 ちよっと、聞いて。もう、全然だめ。家も土地も処分して東京に来ればいいって、となりにいい介護付きの老人ホームがあるからっていくら説明してもいやだって。ふるさとをはなれたくないって。

弘毅 まあ気持ちはわかるよね。

太一 だんだんぼけてきているから、今のうちに先々のこと考えないと困るでしょっていくらいつてもわからないのよ、親せき連中が。

弘毅 親せき？

太一 そうよ。これまで面倒見てきたのは誰なんだって？ もう勝手にしてって言って帰ってきたわ。

弘毅 いいの、そんなんで？

太一 いい、いい。何かあったら、どうせ連絡くるだろうし。

田口茂雄と二階堂渉がやってくる。マスクをしている。

茂雄 ごめん、遅くなった。

太一 遅いわよ。大事な話だったのに。

茂雄 太一だって、今、帰ってきたとこなんじゃないの？

弘毅 立ち会い終わったの？

茂雄 さんさん見て回って、他をあたりますって。

太一 あんたんとこの物件、古くさいのよ。うちもそうだけど。

茂雄 リフォームはしてます。あなたもメンテナンスちゃんとした方がいいわよ。

太一 あら、ご心配なく、肌年齢まだ30代なんです。

弘毅 (渉に) もう、だいじょうぶなの？

渉 うん。とりあえず落ちついたんで。呼び出しがあるかもしれないけど。

弘毅 ありがとう。わざわざ来てくれて。

渉 平谷さん、家族みたいなもんだから。そう言って出てきたんで。

太一 じゃあそろったわね。始めましょう。

太一、マスクをはずそうとする。

弘毅 あ、ちよっと待って。

太一 なに？ 外だからいいでしょ？

弘毅 でも、渉が……

渉 しといってもらえますか？ 万が一ってことがあるんで。

太一 小児科の先生なんかもんね。気をつけなくちゃ。ていうか、相庭さんもおとなりで老人介護だし。

弘毅 なので、マスクはしたままで。

一同、マスクを付け直すなどする。

渉 それで、警察はなんだって？

弘毅 事件性はないって。

渉 よかったね。

太一 当たり前でしょ？ なんでこんなに時間かかるわけ？

茂雄 自宅で亡くなるといういろいろ大変なんだよ。医者が看取ってないから。

太一 事件性はないってわかったんでしょ。

弘毅 でも、発見したときのこととかいろいろ聞かれた。

渉 なんて答えたの？

弘毅 学校春休みだから、ずっと部屋にいるのは知ってたの。でも、Amazonの荷物がいつまでもドアの前に置きっぱなしで。何日か出かけるときはいつもひと言言ってたから、どうしたのかなって。チャイム鳴らしたけど、返事がなくて、合鍵が入ったら、ベッドで寝てて。起きなよってゆすったんだけど起きなくて、身体の揺れ方がなんだか変で、首筋に手を当てたら冷たくて。心臓も止まって。すぐに茂雄ちゃんに連絡して救急車が来るまでずっと心臓マッサージしてた。全然間に合わなかったんだけどね。検死の結果は急性心不全で。薬物反応もなかったって。苦しんだ様子もないし、眠ってる間になくなったんでしょって。

問

茂雄 まあ、よかったよね。よくはないけど。いろいろ無事に済んで。

渉 そうだね。

太一 無事になんか済んでないわよ。疑われてたんでしょ私たち。あんた取り調べされたんでしょ。

茂雄 まあね。

弘毅 事情聴取。

太一 取り調べよ。なんで平谷くん殺さなきゃなんないんだっつうの。絶対、偏見持ってると思う、私たちがゲイだからって。

茂雄 そんなことないでしょ？

渉 ていうか、話したの？

茂雄 何？

渉 このアパート「メゾン・ラ・セゾン」にはゲイばかりが住んでるんだって。

茂雄 言うわけないじゃない。

渉 ヒロちゃんは？

弘毅 言っていない。だって言う必要ないし。このアパートのことは、知ってる人だけが知ってればいいんだし、それと平谷くんが死んだこととは関係ない。

太一 でも、なんだか関係あるみたいなの口ぶりだった。

渉 まさか。

太一 ほら、ごらんなさい。世間なんてそんなもんなのよ。いくらLGBTってことばが身近になったからって、そんなの上辺だけなのよ。ああ、腹が立つ！ 取り調べならカツ井くらい出さないよ。

弘毅 だから事情聴取だって。

太一 きつとあの人のせいよ。平谷くんのお兄さん。感じ悪かったでしょ。会ったことないけど。

弘毅 まあね。

太一 ほら、ごらんなさい。平谷くん、別れた奥さんに実はゲイなんだってカミングアウトしたら、もう子どもには会ってほしくないって言われて。クリスマスプレゼント返されて帰ってきたじゃない。それで平谷くん、どうせ知られちゃうだろうって、実家のお兄さんたちにもカミングアウトしたんでしょ。私はやめなさいって言ったのに。それがもつと縁を切るって言われて。だから、あの人が話したのかも。

渉 お兄さん？

茂雄 かもしれない。

弘毅 考えすぎだって。

太一 だったら、こんなにさっさとお骨持って帰ったりする？

渉 お骨ないの？

太一 そうよ。お葬式こっちであげたっていくらくらいなのに。お別れ会だっけじゃない。というか、私、会ってもいないのよ、平谷くんに。

弘毅 向こうにしてみたら、赤の他人に任せられないってことなんだと思うよ。

太一 どっちが赤の他人よ。

渉 とにかく、これからのこと考えようよ。

一同 うん。

間

渉 平谷さん、いくつだったの？

弘毅 五十一。僕と茂雄ちゃんのいっこ下。

太一 私のいっこ上。学年は一緒。初めてだわ。同じ年の友達が亡くなったの。なんだか身につまされるっていうか。

茂雄 次は自分かっていうか。

太一 ……。

茂雄 ごめん。で、平谷くんの部屋の片付けなんだけど、こういう場合、大家さんがしきっていいと思う。平谷くんのお兄さんもお任せしますって言ってたし。

太一 じゃあ、さっさとやっちゃいましょう。

渉 そうだね、せっかくみんな集まったんだから。

茂雄 人手は多い方がいいに決まってる。

渉・太一 うん。

と言いながら、誰も動こうとしない。

弘毅 何、行かないの？

太一 なんだか、ねえ……

渉 うん……

茂雄 まあ、急がなくてもいいんじゃない。

渉 もう少し落ちついてからで。

太一 そうね。大家さんがいいって言うなら……

茂雄 (弘毅に) どうする？

弘毅 もう少し落ちついてからで……

間

太一 お別れの会とかどうする？

弘毅 やった方がいいよね。

一同 うん。

弘毅 でもどうやって？

太一 平谷さんの友達関係に連絡するのよ。わかる範囲でいいから。亡くなったこと知らせて。私たちの知らない知り合いがいたら連絡してくださいって。

茂雄 友達関係って誰なんか？

弘毅 あんまり知らない。

太一 友達あんまりいなかったわよね。

弘毅 飲み屋関係は少し。マルさんのとことか。

太一 最近、あんまり顔出してないみたいだけど、つきあい長いからね、連絡しとく。
渉 いつにする？

一同、スマホを取り出す。

弘毅 月末の連休中？

太一 連休は休めない。ちょっと外して。

弘毅 じゃあ、その前の土日？

太一 OK。

茂雄 どこでやる？

弘毅 ここでいいんじゃない？ 部屋の片付けもそのときに一緒にできるじゃない。形見分けっていうか、平谷くんのもの持ってってもらえるし。捨てちゃうよりいいと思う。

渉 賛成。

太一 私も賛成。

茂雄 天気悪くなったら？

弘毅 延期。

茂雄 そんなのあり？ ていうか、お別れの会が延期って聞いたことないし、よくないんじゃない？ どこか会場借りようよ。室内の。ここには帰りにでもよればいいんだから。

太一 たしかにそうね。

渉 その方が安全だ。

弘毅 じゃあ、茂雄ちゃん、会場探してくれる？

茂雄 わかった。あたってみる。

問

太一 でも、すぐに見つかってよかったわよね。何日も見つからなかったらって考えるとあれね。

渉 一緒に住んでよかったってことだよね。

茂雄 うん。よかったよね。

弘毅 よくない。ていうか、こうならないために、一緒に住んでたんじゃないの？

太一 こうならないってなに？

茂雄 孤独死？

渉 孤独じゃないでしょ？

弘毅 でもさ……

太一 じゃあ、どうすればよかったってこと？ 寝てる間に死んじゃったんだから、どうしようもなかったじゃない。いろいろ考えちゃうのはわかるけど、考えたってしょうがない。良い方に考えましようよ。

茂雄 そうだよ。いくら大家さんだからって、そんなに責任感じることはないと思う。

弘毅 それはそうなんだけど……

太一 あんたが自分を責める気持ちはわかるけど、しょうがないじゃない。

茂雄 そうだよ。

弘毅 そうじゃないの、実は僕、平谷くんプロポーズされて……

太一 どういうこと？

茂雄 何も聞いてないんですけど。

太一 ちよっとくわしく話しなさいよ。

弘毅 ええ……

太一 いいから！

弘毅 じゃあ。去年の今頃だったかな 平谷くんが僕の部屋に来て。

平谷賢が登場。

弘毅 どうしたの、平谷くん。何、相談って？

賢 実は……

弘毅 まあ、いいから座って。

弘毅、賢に椅子をすすめて二人は座る。

賢 世田谷区の同性パートナーシップ宣誓って知ってる？

弘毅 うん、知ってる。知り合い何人かやってるし。

賢 やらない？ 一緒に？

問

弘毅 何言ってるかわからない。

賢 知ってるでしょ、同性パートナーシップ宣誓。

弘毅 それは知ってるけど。平谷さんと僕？

賢 だめかな？

弘毅 だめとかいいとか、そういう話なの？

賢 お願いします。

賢、頭を下げる。

弘毅 ちょっとやめてよ。ふざけてるの？

賢 ふざけてるみたいに見えたらごめん。割と真剣なんで。

弘毅 割とってなに？ 同性パートナーシップでしょ？ これってある意味プロポーズってこと？ そうなの？

賢 つまりはそういうことです。

弘毅 そんな、急にそんなこと言われても……。たしかに平谷くんはいい人だし、好きだけど。そんな困る。

賢 どうして？

弘毅 どうしてって……

賢 僕の気持ち、受け止めてほしい。

問

弘毅 ごめんなさい。なんていうか、今すぐには決められない。ていうか、友達から始めようっていうにはもうずっと前から友達だけ。

賢 そっか……

弘毅 ごめんね。

賢 ……

弘毅 お互いいいトシだし、一人はさびしいって気持ちになるのはわかるけど。カップルになることばかりが人生の目的ってわけじゃないじゃない。パートナーがいなくても、いい友達がいたら、一人だって全然いいんじゃないかな？

賢 ……

弘毅 友達じゃだめかな？

賢 全然だめじゃない。これからもよろしく。

弘毅 こちらこそ。

賢 じゃあ！

賢、出て行く。

場面は元の庭に戻る。

弘毅 こんなかんじ。どう？ わかるでしょ？ 僕がいろいろ考えちゃうわけ。

太一 わかるけど、あんた自分に都合のいいように再現してない？

弘毅 してないって。だって、突然だよ。突然、平谷くんからプロポーズされたんだから。

渉 プロポーズっていえるのかな？

弘毅 プロポーズでしょ？ デリケートな問題だから、これまでみんなには話してなかったけど。こんなことがあったわけ。

太一 びっくりしたわ。

弘毅 でしょ。

太一 平谷くんが、私以外にもプロポーズしてたなんて。

弘毅 ええ？

太一 私が平谷くんに告られたのは、去年の夏。梅雨が明けた頃だったかな。仕事の帰りにちよつと会えないかって言われて、新宿でお茶したの。

賢がやってくる。

場面は新宿のカフェ。

太一 めずらしいわね。なんの話？ うちの社販で何かほしいものがあつたりする？ あ、お

中元のオーダー？

賢 そうじゃなくて。ちよつと相談したいことがあつて。

太一 相談ってなに？ まさか、恋の悩みのな？ いい人ができた？ ちよつと会わせなさいよ。大丈夫、悪いようにはしないから。

賢 ああ、それはだいじようぶ。そういうんじゃないんで。

太一 なんだ、そうなの？ じゃあ、何？

賢 太一、今、付き合ってる人とかいないよね？

太一 なんて否定形なわけ？

賢 あ、ごめん。いるの？

太一 いません。微妙な年頃なのよ。マルさんがいつも言ってるじゃない。「中途半端が一番よくない」って。だからなのねと思って、体重増やしたり、ダイエットしたりしたけど、全然だめで、中途半端っていうのは、体型の話だけじゃなくて、年齢のことだったんだわって。

賢 50代は中途半端なトシじゃないんじゃないかな。

太一 わかっているの、わかっているけど、もう少し現実逃避させて。そういうわけで、今は、ちよつと恋愛は休んでるかんじ？

賢 じゃあ、いないんだ。

太一 いたら、まっさきに連れて帰って見せびらかしてるわよ。
賢 よかった。
太一 何よ、よかったって。失礼しちゃうわね。
賢 実は相談があつて。
太一 なーに？
賢 お願いがあるんだけど。
太一 だからなに？
賢 世田谷区の同性パートナーシップ宣誓してくれないかな？
太一 私？
賢 うん。
太一 だれと？
賢 ぼくと。
太一 え、なんで？
賢 お願いします！
太一 それってお願いされてするもんじゃないでしょ。だって、つきあってもいないのに。
賢 じゃあ、これからということよ。
太一 私たちいつもお互いのタイプの男の話とかしてたじゃない。平谷くんは、スポーツマンタイプの細マツチョ、私はいかつい男くさいガチムチ。全然違うでしょ私たち？
賢 それはそうなんだけど……
太一 夢をあきらめちゃだめだって。
賢 夢と現実の違いか……
太一 残念な現実で悪かったわね。
賢 ああ、ごめん。
太一 別にいいんだけど、そういう話友達ノリでしちゃうと、もう無理っていうか、友達から恋人っていうののむずかしさってそこなんだと思う。
賢 そうか……。そうだね。
太一 うん。じゃあ、ごめんなさいね。元気出して。
賢 ありがとう。じゃあ。

賢退場

渉 これって告られたっていうのかな？
太一 いうでしょ？ だから今までだまってたんじゃない。平谷くんの気持ちを思って。
弘毅 僕が断ったから太一に行つたってこと？
茂雄 時系列としてはそうだね。
太一 相馬さんでも私でもいいってどういうことなわけ？
弘毅 タイプにはこだわらないってこと？
太一 失礼しちゃうわね。誰でもいいってわけ。
渉 自分をおとしめるのはよくないよ。

太一 もう他人事だと思つて。

渉 他人事じゃないんで。僕も実はその話されたことあるんで。

一同 ええ？

渉 去年の秋、夜勤明けで帰ろうとしたら、平谷さんとばったり会つて。平谷さん、うちがかかりつだけだから。その日は、その前の週の健康診断の結果を聞きにきたんだつて言つてた。で、お昼一緒に食べようつてことになつて。

場面は、ファミレス。

賢と渉が向かい合つて座る。

食事は終わったところ。

渉 平谷さん、デザートはどうします？ 僕。パフェいきますけど。

賢 僕はいいや。血糖値高くて、血圧も。気をつけた方がいいですよつて。

渉 健診の結果ですか？

賢 うん、他は全部問題なかつただけどね。

渉 菓は？

賢 菓飲むほどじゃないから食事に気をつければいいつて。

渉 じゃあ、僕オーダーしちゃいますね。シャインマスカットのパフェと和栗のモンブランパフェ、どっちがいいと思います？

賢 シャインマスカットがいいんじゃない？

渉 平谷さんもいきます？ 和栗のパフェ、シェアしてみるとか。

賢 いいよ、遠慮しとく。

渉 じゃあ、ぼくだけ。

渉、タブレットでオーダーする。

賢 涉くんは健康なの？ 医者だから当たり前か？

渉 医者の不養生つていいますからね、からだ壊してる人多いですけど、僕はいまのところは。でも、大台に乗ったんでいろいろ気にはしてるんですけど。

賢 大台つて、40になつたところですよ。

渉 身体の変化は40代から始まるんですよ。じゅうぶん大台です。

賢 そうだよな。初めて会つたのはまだ学生だったんだもんな。年取るはずだ。

渉 平谷さん、全然変わらないですよ。ゲイのトシのとらなさつてなんででしょうね。特に気をつけてるわけでもないのに、化け物みたいに若くて。

賢 化け物つて……

渉 ヒロちゃんもそうだし、太一さんも茂雄さんも。

賢 いつも見てるからだよ。久しぶりに会つたら、やっぱリトシとつたつて思うよ。

渉 このあいだ、理彦と久しぶりにあつたんですよ。アメリカから帰つてきて。

賢 別れてずいぶん経つのに、つきあいあるんだ。

渉 びっくりしますよ。ガチムチのイカホモになつてるんで。

賢 理彦くんが？
渉 写真見ます？
賢 うん。

渉、スマホで写真を見せる。

賢 これです。

渉 これは、言われなきやわからない。

賢 彼氏に合わせて食べてたら、こうなったんだって言ってましたけど。

渉、スマホをしまう。

賢 渉くんは、なんで医者になったの？

渉 家の跡継ぎって親に言われて。別にいやじゃなかったんで。

賢 小児科医になったのは？

渉 子どもかわいいいじゃないですか。変な意味じゃなくて。自分で子どもを産んで育てるってことはたぶんしないだろうから、だったら育てることをしようって。命を生み出せないけど、命を守ることをしようって。ゲイは生産性がないなんて言わせないっていうか。命を守るか。

賢 渉 平谷さんだって、高校の先生じゃないですか。似たような動機なんじゃないですか？
渉 というか、お子さんいるんですよね。もうずいぶん大きくなって。

賢 大学入って、このあいだ成人したよ。
渉 育てあげたってかんじ。

賢 そんな全然だよ。養育費送ってたんだけどね。再婚したらそれももういいって。だから、もう他人みたいなもん。ずっと会ってないしね。

渉 親子なんてそんなもんですよ。うちだって、一応、親父の病院で勤めてますけど、仕事以外で話すことなんかありませんよ。

賢 そういうもんかなあ。

渉 平谷さん、付き合ってる人とかいないんですか？

賢 いないない。このトシになるとね。今さらってかんじなんだよ。
渉 そんなあきらめるの早すぎないですか？

賢 諦めてるつもりはないんだけど。渉くんは？

渉 いません。職場ではオープンにしてるんですけど、なかなか出会いがなくて。理彦とつきあってたときに、同性パートナーシップがあったら、形だけでも家族になれて、ずっとづいていられたんじゃないかって思ったりするんです。

賢 今でも好きなんだ？

賢 自分に都合のいい想像ですよ。理彦、アメリカで今の相手と同性婚するらしいんですよ。結婚式には元彼として来て欲しいって言われてるんですけどね。

賢 行くの？

賢 渉 ええ、コロナが終わったらですけど。あ、パフェこっちはです！

場面は解散。

太一 子どもが大きくなって、ふとさびしくなる。自分は一人なんだから。ノンケ男性一般と同じ。しかもゲイ男性としては、頼るべきしがらみがない。だからパートナーシップ。

弘毅 そういうことなの？

太一 そうよ、そうに決まってる。ああ、うそでもいいから付き合っただけでよかったですかな。

渉 うそはよくないでしょ。

太一 悪いことしちゃったわね、私たち。

弘毅 うん。

太一 ああ、もっと親身に相談に乗ってあげればよかった。

茂雄がファイルから書類を一枚取り出して一同に見せる。

弘毅 なにそれ？（書類を見て）同性パートナーシップ宣誓？！

太一 やだ、あんた引き受けたの？！ ていうかあんたもなの？ 近場で間に合わせすぎ。

茂雄 近場で悪かったわね。捨てる神あれば拾う神あり。私が拾わせていただきました。

太一 ちよつとどういふことよ？ ふざけてる場合じゃないでしょ？

弘毅 これってほんとなの？

茂雄 もちろん。

弘毅 どうして？

茂雄 どうしてって、なんだか気の毒になっちゃって。

渉 愛情じゃなくて同情ってこと？

茂雄 そんなんじゃない。強いて言うなら、友情かな。

一同 ええ？

賢がやってくる。場面は茂雄の部屋。

賢 ほんとうにいいの？

茂雄 うん、いいよ。せっかく制度があるなら使いたくなって思ってたんだ。相手はいないけど。

賢 相庭さんはいいの？

茂雄 だいじようぶ。付き合ってたのすっごい昔だから。今が一番いい距離感っていうか。だから、ご心配なく。

賢 ありがとう。じゃあ、申請の準備するよ。

茂雄 何か用意するものは？

賢 戸籍抄本と本人確認の書類。

茂雄 免許証でいいかな？

賢 だいじようぶ。申請すると宣誓要件に該当するかどうかを聞かれるんだけど、僕が話しておいていいかな？

茂雄 いいけど何聞かれるの？ 二人の関係とか？ なんて言うつもり？

賢 二十年一緒に暮らしています。

茂雄 一緒に、部屋は別だよね。

賢 でも、一緒にだよ。寝室別にしてるカップルみたいなもんだから。

茂雄 カップルなの？

賢 これからはね。あ、やっぱりだめかな。うそついてるみたいな気がする？ どう？

茂雄 うーん。(考えこんで) うそじゃないと思う。ていうか、これからどうなるかわからないし。いちおう、確認んだけど、「これから」付き合い始めていくかんじ？

賢 うん、できれば。でも、無理してもらわなくていいんで。

茂雄 わかった、無理はしない。ただ順番が逆になってるだけ。そういうことでいいのかな？

賢 うん。そういうことでお願いします。何かあったときには、お互いに一番に連絡がいくような関係になれたらいいんで。

茂雄 それなら別にこんなことしなくてもいいんじゃないの？

賢 いろいろ調べただけど、今のところ、他にないんだよ。血縁以外には。あとは養子縁組をするとか、後見人になるとかなんだけど、それも違う気がして。実家とは縁が切れるから、どうしようもなく一人なんだなって。一度結婚してるから、戸籍も新しく独立してて、今そこにいるのは僕一人なんだ。誰もいない。なんだか心細くてさ。もちろんこれは僕だけの一方的な問題じゃなくてお互いに。パートナーシップだから。

茂雄 うん、お互いに。

賢 宣誓手続きがいつになったか決まったら連絡するね。それじゃ、また！！

茂雄 じゃあ！！

賢、退場。

太一 あんたたち、行ったの区役所？

茂雄 うん。去年のクリスマス。

太一 なんで黙ってたのよ。

茂雄 内緒にしてたわけじゃないんだけど、そのうちにちゃんと発表しようって話してて。

渉 なんか宣誓式みたいなのあるんでしょ？ だいじょうぶだったの？

茂雄 うん、うそついてるみたいないな気持ちになるかと思ったけど、ならなかった。そのときかな、初めて平谷くんのこと好きだって思ったの。

弘毅 そういえば茂雄ちゃん、よく平谷くんの部屋に行ってるなあと思ってた。

太一 あんたたち、どういう間柄だったの？

茂雄 どういうって？

太一 だから、ほら、なんていうか……

渉 肉体関係。

太一 それ！ どうなの？

間

茂雄 それがさ、なかったんだよね。今さらそういう気持ちにならなくて。平谷くんもおんなじだって言った。

渉 結婚したけど、セックスストレスってこと。
茂雄 そういうこと。こんなことになるなら、しとけばよかったって思うんだけど。

間

弘毅 でもなんでそんな急にしたかったんだろう同性パートナーシップ宣誓。

太一 あ！！

弘毅 なに？

太一 もしかして、平谷くん、余命宣告されてたんじゃない。ガンのステージ4とか。

渉 去年の秋の検診では何もなかったって。異常があったら、検死の結果でわかるはずだよ。

太一 だったら、平谷くん。なんで死んじゃったのよ。

風が吹いて樹を揺らす。

間。

弘毅 それじゃ、行こうか、平谷くんの部屋。何かわかるかも。

太一 そうね。

弘毅 茂雄ちゃん。

茂雄 うん。

一同、今度は立ち上がり歩き出す。

第二場 春2

平谷賢の部屋。

きれいに片付けられた物のない部屋。
椅子がいくつもあるだけ。

弘毅、太一、茂雄、渉がやってくる。

太一 まあ片付いてること。

弘毅 ほんとだ。

渉 これって前から？

弘毅 きれいい好きではあったよね。

茂雄 断捨離しようって一時期がんばってたから。荷物ずいぶん捨ててた。他の部屋はけっこう散らかってるんだけどね。

弘毅 じゃあ、何から始める？

太一 こんなに片付いてるなら、このままでいいんじゃない？

弘毅 そうだね。急いでやることもないか。

渉 だめだよ。ちゃんと探さないと。

太一 探すってなに？

渉 お金とか通帳とか、保険の証書とか、そういうもの。

太一 (茂雄に) どこにあるの？

茂雄 知らない。

太一 あんたパートナーなんでしょ。いざというときの話とかしてないの？

渉 遺言書とかエンディングノートとか、二人で一緒に書いたりするもんなんじゃないの？

茂雄 ああ、パートナーシップ宣誓のあとで、遺言書とかそういうの作ろうかって話してたんだけど、遺言書ついていえば「犬神家の一族」だよねって話で盛り上がって……

太一 「ニセモノです、ニセモノです、その遺言状はニセモノです」

茂雄 「ひどいわ、私のことなんか何も書いてないじゃない」

弘毅 ふざけてる場合じゃないでしょ。

太一 ごめんなさい。

渉 どこかにあるかもしれない。探してみよう。

弘毅 うん。

渉、茂雄、部屋を出て行く。

太一 この部屋には何もなさそうね。

弘毅 いざというときの書類ってどこに置いてる？

太一 トイレの本棚。非常持ち出し袋と一緒に。

弘毅 ああ、いいね、それ。

太一 でも、トイレに行くたび見ちゃうのが微妙なんだけど。相庭さんは？

弘毅 玄関の靴箱の上。

太一 とりあえずトイレと玄関、探してみる？

弘毅 そうだね。玄関には何もなかったと思うけど。

茂雄と渉がやってくる。

茂雄、エンディングノートらしき冊子と通帳と印鑑を持っている。

太一 どうだった？ 何か見つかった？

茂雄、通帳と印鑑を見せる。

茂雄 通帳と印鑑。

弘毅 どこにあったの？

渉 玄関の靴箱の中。

太一 隠したわね。盗難防止ってこと？

茂雄 一緒にしまっちゃだめなのに。

太一 でも、見つかってよかったわよ。いくらあるの？

弘毅 いいの、勝手に見て？

太一 見るくらいいいでしょ。それにあんたパートナーなんだから。

茂雄 じゃあ……

茂雄、通帳を見る。固まる。

茂雄 ……。

太一 どうしたのよ？

太一、通帳を見る。固まる。

弘毅 二人とも何してんの？

弘毅、通帳を見る。固まる。

渉 どうしたの？

弘毅 (通帳を見せて) 一千万。

太一 それなりにあったわね。

茂雄 うん。びっくりした。

渉 普通預金で貯めててもしょうがないのに、運用したりしてないのかな？

茂雄 あとは教員の共済くらいじゃないかな。運用とかよくわかってないと思う。

太一 で、これはどうなるわけ？

弘毅 どうなるって？

太一 誰のものになるの？

問

弘毅 茂雄ちゃん？

茂雄 同性パートナーシップ宣誓しても相続の対象にはならないと思う。

太一 遺言書があったら違うんじゃない？ そこに何か書いてない？

茂雄 なにも。買うだけ買って、何も書いてないんだと思う。

茂雄、太一にエンディングノートを見せる。

太一、エンディングノートのページをめくって。

太一 もう何してんのよ？

弘毅 じゃあ、これは誰が相続するの？

茂雄 平谷くん、親御さんは亡くなってるから、お兄さん？ あとは別れた奥さんと子ども？

渉 でも、みんな縁が切れてるんでしょ？

茂雄 そうだけど、そういうことになるんだと思う。

太一 いいのそれで？ 闘わないの？

茂雄 そんなことしたくない。ていうか、お金ほしくてパートナーシップ宣誓したわけじゃないから。

太一 何、かっこつけてんのよ。

玄関のチャイムが鳴る。

茂雄 誰だろ？

弘毅 クロネコさんかな？（奥に向かって）ご苦労さまです。ドア開いてるんで荷物置いておいてください。

玄関のチャイムが鳴る。

弘毅 ちょっと見てくる。

弘毅、出て行く。

平谷賢の兄の剛が入ってくる。大きなバッグを抱えている。

剛 鍵開いてたんで……

太一 だれ？

弘毅 平谷くんのお兄さん。

剛 突然おじゃましてすみません。

弘毅 もうお帰りになったんだと思ってました。

剛 どんなどころに住んだのか、一度、見ておこうと思ひまして。

弘毅 こんなところですか。

剛 みなさんは？

弘毅 平谷さんの友人です。

太一 清水です。

渉 二階堂です。

剛 みなさん、こちらに？

弘毅 ええ。あ、この人（渉）は違うんですけど。

剛 そうですか。賢がいろいろお世話になりました。

茂雄 いえ、こちらこそ……

剛 ここ賢の部屋ですよ。みなさん、何されてたんですか？

弘毅 部屋の片付けとか、遺品の整理とか……。一応、大家なので。

太一 一応じゃないでしょ。

茂雄 みんなでこれからどうしようかって話してたんです。

太一 あの、それもしかして、お骨ですか？

剛 ええ、そうです。

剛、バッグから白い風呂敷に包まれた骨箱を取り出して椅子の上に置く。

問

弘毅 お線香もってくる。

剛 すぐ失礼するんで。お会いできてよかった。いろいろかがいたいことがあります。

弘毅 为什么呢？

剛 賢の遺産というか、残されたものがあるかどうか確認できたらと。まあ、大したものはないでしょうけど。(通帳とエンディングノートを見て)それは？

弘毅 賢さんのエンディングノートです。何も書いてないんですけど。

剛、エンディングノートを見ている。

弘毅 この通帳、お持ち下さい。口座凍結されちゃうと僕たち何もできないんで。

剛、通帳を見て

剛 (おどろいて) こんなに……

茂雄 養育費送らなくてよくなってから、ずっと貯めてたんじゃないですか？

弘毅 別れた奥さんと息子さんは？

剛 ようやく連絡ついたんですけど、そっけないもんですよ。葬儀も一切おまかせしますって。遺産についても相続放棄するって言ってました。この話をしたら、気が変わるかもしれませんけどね。

問

茂雄 あの、葬儀のことなんですけど、どんなかんじですか？

剛 親族だけでうちうちにと済ませようと思っっています。

茂雄 あの、僕、伺ってもいいですか？

剛 ああ、どうぞお気遣いなく。全部こちらでやりますんで。だいじょうぶですから。

茂雄 うかがいたいです。名古屋ですよ？

剛 名古屋からけっこうあるんですよ。田舎ですから。わざわざ来ていただかなくても。

茂雄 わざわざ行きたいんです。

弘毅 あの、僕も。

太一 私も。

剛 (ため息) 困りましたね。

茂雄 なんですですか？ 東京の友人として伺うのがなんで困るんですか？

問

茂雄 賢さん、田舎のお墓には入りたくない、散骨してほしいって言ってました。

剛 それは先日うかがってお断りしたはずです。
茂雄 だからせめてお葬式には参列したいんです。

間

太一 (茂雄に) ちょっと。あんた、出しなさいよ。こういうときのためのあれでしょ？ ほ
らあれ！

茂雄 ……。

太一 もう！ この人、賢さんのパートナーなんです。

茂雄、宣誓書を出す。

剛 (見て) 世田谷区同性パートナーシップ宣誓？

太一 この人には参列する権利があるんじゃないですか？ 喪主になったっていくらいなはず。

剛 これ本物ですか？

太一 は？ 決まってるじゃないですか？

剛 (茂雄に) あなたには先日もお会いしました。なんであのとき言わなかったんです？

太一 そうよ、なんで言わなかったのよ？ 一番大事なことでしょ！

茂雄 それは……

剛 よく知りませんが、これ法的な拘束力はないんですよ。もし本物だとしても。こんなものを持ち出されても困ります。葬儀への参列はご遠慮ください。

間

茂雄 こういうことになるんじゃないかと思ってた。言っても否定されるんじゃないかって。だから言わなかったんです。

剛 ……。

茂雄 言わなくても何も変わらない。相続の権利が法的に認められてるわけじゃないし。ただの紙切れだし、亡くなったら、解消してしまうものだし。だったらなかったことにしちゃってもいいんじゃないかって。これは本物だけど。知らせなくてもいい人には黙ってていいんじゃないかって思ったんです。葬儀への参列は遠慮させていただきます。

間

剛 すみませんね。田舎なんでいろいろうるさいんですよ。波風立てずに見送ってやりたいと思います。では、これで失礼します。あ、そうだ。これ(通帳)はいただいていきませんが、他に大きな借財があったりはほしくないでしょうか？

弘毅 ないと思います。家賃も月々きちんといただいていますし、ローンがあったら、これだけの額になってないでしょうし。

剛 そうですか。実は、私も相続放棄しようと思っていたんですが、そうするとこの貯金が宙にういてしまいますね。

茂雄 息子さんに話してみてもらえますか？ それが一番いいと思うんで。
剛 やってみましょう。では……

剛、骨箱をバッグに入れようとすると、太一が骨箱を抱きかかえる。

剛 なんですか？

弘毅 太一、やめて。それおろして。

太一 散骨する。私が散骨する！

剛 何を言い出すかと思つたら。

太一 調べたことある。許可はいらないんでしょ？ 撒けばいいんでしょ？

茂雄 太一……

剛 そんな乱暴な。

太一 田舎のお墓に入れちゃう方が乱暴よ！

渉 でも、そのままだまげないんだよ。散骨するなら火葬場で粉にしてもらわないと。

弘毅 そのまま撒くわけにいかないでしょ。返して。

太一 じゃあ、お葬式に行く。みんなで。

茂雄 太一、いいから、返して。

太一 よくない。お葬式を遠くから見守るけなげな愛人のつもり。悪いけど似合わないから。わたしたちは正々堂々と平谷くんを見送る。平谷くんのために。

間

太一、骨箱を茂雄に渡す。

茂雄 葬儀には伺わせていただきます。みんなで。

剛 ……わかりました。

弘毅 ありがとうございます。

太一 当然でしょ。

剛 ただ、その同性パートナーシップのことは言わないでもらえますか？ それでいいなら？

茂雄 ……わかりました。

太一 ちよつと……

茂雄 葬儀の日時が決まったら連絡ください。
剛 わかりました。

剛、骨箱をバッグにしまつて。

剛 では、失礼します。

剛、出て行く。

茂雄 じゃあ、行くか、みんなで。

弘毅 涉どうする？

渉 僕はいいかな。悪いけど。コロナも心配だし。

太一 行きましようよ。東京では友達がいっぱいいて、幸せだったって、思わせたいじゃない。一人ぼっちなんかじゃなかったって。

渉 もうお別れはすんだみたいなきもちになったし、こっちでお別れ会するんですよ。僕はそれでいいんで。

太一 そう？ じゃあ、三人で。

弘毅 亡くなったってことを知らせなきゃね。どうしよう？

茂雄 Twitterやっつた。

渉 平谷さんのアカウントにログインできる？

茂雄 たぶん。スマホがまだ生きてるから。

太一 やってみて。

茂雄、賢のスマホを開く。Twitterにログインする。

茂雄 あ、できた。

弘毅 書き込みして。

茂雄 ぼく？

太一 パートナーでしょ。ほれ！

茂雄、入力する。

茂雄 まさるさんが亡くなりました。

弘毅・太一・渉 うん。

茂雄 お別れの会を後日おこなう予定でいます。

弘毅・太一・渉 うん。

茂雄 まさるさんの知り合いのみなさんにお知らせください。

弘毅・太一・渉 うん。

茂雄 友人一同。

太一 友人一同？

茂雄 友人一同。送信。

茂雄、ツイートする。

見守る一同。

第三場 夏 2022年～2019年

庭。

7月初旬。

蝉が鳴いている。

太一が日傘をさしてやってくる。
正面にある樹に近づき、日傘をとじると、根本に向かって手を合わせる。
茂雄がやってくる。

茂雄 何してんの？

その声におどろいた蝉が飛んでいった。太一におしっこをひっかけて。

太一 (ハンカチで蝉のおしっこを拭きながら) やだ、もう……、あんたのせいだからね。

茂雄 なんだか久しぶりに聞いたわ蝉の声。このあたりはもう絶滅してるんじゃないかと思っ
てた。

太一 ここだけよ。この樹に集まってくるのよね。リモートでミーティングしてると、田舎か
らですかって疑われた。

茂雄 なに手合わせてたの？

太一 ここにいろんなもの埋めたなと思って。うちのアロワナと金魚と相庭さんとこのニヤオ
ント。

茂雄 そうだったね。

太一 前に、ここにタイムカプセル埋めようかって話したじゃない。みんなでフリマに行った
帰り、売れなかったもの埋めちゃおうかって。

茂雄 でも、埋めなかった。

太一 埋めなかったけど、何十年か経ったらみんなが開けてみたりするのかなって誰かが言っ
て。その時私、でも、誰がいなくなったりするのよって言ったじゃない。ほんとに
そうなっちゃったなって。笑って話したわね、私たち。

茂雄 うん、笑ってた。

間

茂雄 ねえ、それ持ってくつもり？

太一 それって？

茂雄 それ。

と日傘を指す。

太一 当然でしょ。もう梅雨明けしたのよ。必須アイテムじゃない。

茂雄 避暑地でショッピングじゃないんだから。海辺でしょ、湘南でしょ。海水浴場でしょ。

太一 私、海入らないから。ていうか、あんた入るの？

茂雄 ちよつとだけ。水着、新しいの買ったから。

太一 いいトシしてやめて。いたいたしいから。それに、今日は遊びに行くんじゃないんだか
らね。

茂雄 あんただって、充分、夏のお出かけってかんじじゃない。

太一 これは私の夏の正装です。日焼けして後悔するよりはいいでしょ。

茂雄 言ってなさい。

弘毅がやってくる

弘毅 ごめん、おそくなった。

太一 ああ、渉がまだ来ないのよ。

弘毅 レンタカー屋でもめてるんだって。頼んでた車がないみたいで。

太一 またなの？

弘毅 なんだか大きいのじゃなくなるみたい。でも、4人で乗るなら充分だって。

茂雄 時間かかるのかな、遅れたくないんだけど。

弘毅 こっち向かってるってLINEあった。それでね、今、電話があつて。

太一 渉？

弘毅 そうじゃなくて、平谷くんのお兄さん。これから来るって。

茂雄 ええ？

剛がやってくる。

剛 すみません。近くまで来たので、突然来るのもあれかと思って、お電話さしあげたんですが。

弘毅 電話でもお伝えしたんですけど、これから出かけるところなんです。私たち。

剛 田口さんですか？

茂雄 そうですけど。何かあったんですか？

剛 ええ、まあ……

蝉がまた鳴き出す。

弘毅 ここじゃなんなんで、部屋で話しませんか？

太一 そうね、暑いし、うるさいし。

茂雄 そうだね。

弘毅と茂雄、歩き出す。

剛 ああ、すぐ済むんで。ここでけっこうです。田口さんにちょっと伺えばいいので。

茂雄 为什么呢？

間

剛 いやあ、ちょっと調べさせてもらったんですが、賢、保険に入っていたようで。その受け取り人が誰なのかを確認したいのですが。

茂雄 保険ですか？

剛 生命保険です。別に疑ってたわけじゃないんですが、一応と思いまして。去年から調べ

茂雄　られるようになったんですよ。ただ、どのどんな保険で、誰が受け取り人かということとはわからないんですが、ここらあたりがおありかと思ひまして。

蝉が鳴き止む。

茂雄　隠してたわけじゃないんです。賢さんの部屋を探してたら証書が見つかって。僕も知らなかったんですよ。勝手に受け取り人を変更してたみたいで、息子さんから僕に。パートナーシップ宣誓のときに用意した書類でOKになったみたいなんです。

剛　つかぬことをお聞きしますが、保険金はいくらですか？

茂雄　1000万です。

剛　受け取られたんですね？

茂雄　いえ、まだ手続きしてないんです。

剛　どうして？

茂雄　三年は猶予があるみたいなんです。受け取れることは受け取れるみたいなんですけど。なんとなく。

剛　なんとなくって、大金じゃないですか。いいんですか？

茂雄　ええ、今のところは。

問

弘毅　相続の手続きは終わりましたんですか？

剛　ええ、なんとか。いろいろありがとうございました。

弘毅　預貯金は奥さんと息子さんに？

剛　相続放棄の手続きをしたそうです。

茂雄、
太一、弘毅　ええ？

剛　相続放棄の期限の三月はもう過ぎましたからね。これで確定です。

茂雄　どうして？

剛　さあ、なんででしょうね？　これだけの遺産があるってちゃんと伝えたんなんですが。いらないうって。これから先、どんな借金が出てくるかわからないからって。

弘毅　それはないってお伝えしましたよね。

剛　信用できないって言っていましたよ。

太一　ひどいわね。

茂雄　じゃあ、相続は？

剛　私のところに全部。私は相続放棄しなかったの。私もまだ何もしてないんですよ。手が付けられない気持ち、わかります。いや、保険のことがわかってよかったです。

渉がやってくる。

剛　渉　ごめん、遅くなった。(剛に) あ、どうも。
どうも。

渉 どうしたんですか？

弘毅 相続と保険のことであつと。

剛 もう済んだので私はこれで。お邪魔しました。

弘毅 いえ、おかまいもありませんで。

渉 じゃあ、行こうか。高速使えば間に合うから。

太一 もう、ゆっくりドライブできるかと思ったのに。

渉 それは帰りでもいいじゃない。

太一 そうね。

剛 どちらへお出かけですか？

弘毅 あ、葉山です。

剛 葉山、湘南ですね。早い夏休みですか。

茂雄 エア散骨しようって。

剛 エア散骨？

茂雄 気持ちだけでもと思って。うちの不動産屋がお世話になってるオーナーさんがクルー

ザー持つてるんで、それに乗せてもらうんですよ。

弘毅 ただ海見て、クルーザーに乗るだけなんですけどね。

太一 だからエア散骨。

剛 はあ……。

茂雄 三年前の夏、みんなで行ったんですよ。葉山に。遊びついでに、もしも誰かが死んで、散骨することになったら、どのへんがいいかなって。

太一 あまり真剣に探すっていうんじゃない、ありなのかどうかになってくらの気持ちで。

剛 三年前ですか？

弘毅 ええ、まだコロナが大変になる前です。ぼくらと賢さんと5人で。

場面は三年前、2019年の夏。

一同、椅子をならべかえて、車中。

剛は賢として、車に乗り込む。

運転は渉、助手席には弘毅がいる。

太一 もっと大きな車借りなさいよ。後部座席に3人は無理。前はもっと大きな車だったでしよ。

渉 同じです。みんなが少しずつ大きくなってるとだと思えますよ。

茂雄 たしかに。

太一 私は20歳の体重。キープしています。

渉 体重は同じでも体積が変わったんじゃないですか。

茂雄 たしかに。

渉 長者ヶ崎あたりから、海岸沿いを見てくださいか？

太一 そうして。

渉 じゃあ、ルートを変更して、横横から行きますね。

弘毅 了解！

しばらくドライブ。

太一 この道、前にも通ったんじゃない？ 逗子マリーナのユーミンのライブに行ったとき。いつですか？

茂雄 2004年、最後の逗子マリーナ。

太一 15年も前なの。アンコールの「埠頭を渡る風」。ドライブするたび思い出す。緩いカーブでたおれてみたりするのよ。

車が大きくカーブして、みんな横にゆれる。
元に戻って。

太一 あまりときめかないわね。

弘毅 悪かったね。

茂雄 危険を感じるだけだから、ちゃんと運転して。

渉 太一さん、前も同じこと言っていましたよ。

茂雄 老化ね。同じこと言っちゃうの。

太一 悪かったね。

賢 ねえねえ、葉山の一色海岸にカラフルカフェっていうのがあるんだって。行ってみたいな？

弘毅 カラフルカフェ？

渉 LGBTQの団体がやってる海の家です。僕行ったことありますよ。

太一 やだ、そういうノリなの？ 活動家っていうか。

渉 普通のビーチハウスですよ。ゲイだってこと隠さなくていいっていうか、みんなオープンにしてるんで。

茂雄 へえ、ちよつと行ってみようか？

弘毅 うん。

車を停めて、みんな降りる。

弘毅 わあ、海！

賢 きれいだな。

茂雄 砂浜も。海水浴場にしては。

太一 (茂雄に) どこ見てんの。いい男探しに来てるんじゃないからね。

茂雄 どうしても目がいつっちゃうよね。

賢 散骨の場所を見つげに来たのに、男に目が行くって、なんだかすごいね。

弘毅 煩惱からは逃れられないってこと。

太一 否定できません。

渉、砂浜を見ていたが、何かを拾い上げる。

渉 これ！
弘毅 なに？

一同、駆け寄ってみると、それはシーグラスのかけら。

太一 シーグラス？
渉 うん。いっぱい落ちてる。

渉、拾ったシーグラスを海に向かって投げる。

太一 ちよつと何すんのよ。
渉 え？

太一 せっかく何年もかけて浜辺にたどりついたのに。気の毒でしょ。

渉 またすぐもどってくるよ。そうやって、だんだん角が取れてすべすべになるんだから。

太一 そういうもんなの？ 私、拾っていこう。

賢 僕も。

渉 拾って家に持って帰られる方が気の毒じゃないんですか？

太一 いいの、いいの。

みんな、シーグラスを拾い集める。

弘毅 そろそろ行かない、カラフルカフェ。

太一 そうね。

茂雄 うん。

茂雄、太一、賢、サングラスをかける。

弘毅 何気合入れてんの？

太一 気合い入れないと行けない気分なの。

茂雄 じゃあ、行こうぜ。

太一、賢 おう。

弘毅 野郎ぶる必要もないよね。

太一 渉、先に歩いて。

渉 なんでですか？

太一 いいから。

渉 じゃあ、行きますよ。

渉を先頭に、太一と茂雄、歩いて行く。

賢 立ち止まり、サングラスを外して、海を見ている。

弘毅 (賢に) どうしたの、平谷くん？

賢 うん？ この海に散骨されたら、海の方からこちらを見ることになるんだね。
弘毅 ああ、たしかに。良い眺めかも。
賢 たいくつしないだろうな。
弘毅 行くよ。
賢 うん。

弘毅、先に行った面々を追って退場。
賢が残る。

場面は2022年にもどる。

退場した3人がもどってくる。

太一は、手にガラスの瓶に入ったシーグラスを持っている。

太一 これがそのとき拾ったシーグラス。

茂雄 平谷くんの部屋にずっとあったんで、今日はこれを撒いてこようかなって。

剛 そうですか。それを。

弘毅 (剛に) よかったら、一緒に行きませんか？

剛 いや、私は……

渉 車、5人乗れると思いますよ。

太一 ちよっときついけど。

剛 仕事があるので、今日はこれで。

弘毅 じゃあ、僕たち出かけますけど、平谷くんの部屋、鍵開いてるんで、よかったら。

剛 まだそのままに？

弘毅 ええ、みんないつでも入れるようにしてあるんですよ。春にお別れ会をここでやって、形見分けして部屋も片付けるつもりだったんですけど、なかなか集まれなかったんで。

茂雄 そのうちにこのままでいいんじゃないかって。

剛 いろいろとすみません。

弘毅 そんな、全然、僕たちが勝手にやってるんで。それじゃ。

剛 それでは。行ってらっしゃい。

一同、出かけて行く。

蝉が鳴き出す。

剛、しばらくその場に立っている。

第四場 秋 転勤とカミングアウト

秋の庭

茂雄、太一、弘毅がエンディングノートを手を集まっている。

各自、自分のノートを見ながら。

弘毅 じゃあ、次、緊急連絡先。誰にしてる？

太一 相庭さん。

茂雄 弘毅。

弘毅 二人とも？

太一 大家さんでしょ。

弘毅 じゃ、ぼくは？

太一 どっちでもいいわよ。

茂雄 二人ともしておいたら？

太一 そうね。どっちかに何かあってもいいように。

弘毅 じゃあ、そうしよう。自分以外の二人。

太一、茂雄 了解。

弘毅 次、延命措置の是非は？

太一 じゃなくていい。

茂雄 じゃなくていい。

弘毅 いいの？

太一 いい。何かあったらそれまでよ。いいから、何もしないで。

茂雄 これって、たとえば人工呼吸をやめるかどうかという判断もするってことだよな。

弘毅 そう。でもきびしいな。平谷くん、救急車が来て、隊員の人が救命措置いろいろしてくれたけど、止めるって決めるのすっごいつらかった。

茂雄 うん。

太一 そうやって悩まなくていいように、先に決めておくんでしょ。平谷くんのことを無駄にしないように、これ（エンディングノート）だって三人分用意したんじゃない。

弘毅 そうだった。じゃあ、次、介護は誰にしてほしいか？

太一 誰にもしてほしくないわ。

茂雄 そういうわけにもいかないでしょ。

太一 じゃあ、すぐに施設に入れて。介護されるなら他人がいい。

茂雄 弘毅、介護士なんだから、頼んじゃえば？

太一 絶対無理。仕事で割り切ってくれる人じゃないとわがまま言えない。ていうか、身内が介護するのが当たり前っていうのほんとによくないと思う。

弘毅 僕、割り切るよ。

太一 結構です。もういいんじゃない？ 後は各自でやりましょう。

弘毅 全部やっちゃおうよ。

太一 これ気が滅入るのよ。いろいろ考えてると。

茂雄 そうやって放っておくとあとあと面倒だから、三人でやるってことにしたんじゃない。言い出したのあんたよ。

太一 今日はここまで。

弘毅 じゃあ、走ろうか？

茂雄 うん。

弘毅、立ち上がる。

太一 私、今日はパス。

弘毅 行こうよ。ほれ。

太一 三人で一緒に走るのやめない？

弘毅 一人じゃ絶対にやらないから一緒にやるってことにしたんじゃない。

茂雄 適度な運動は大事だよ。

太一 適度じゃないわよ。過剰よ。

弘毅 じゃあ、歩くだけでもいいから。

太一 (弘毅に) あんた医者に言われたんでしょ、走る前に10キロ痩せなさいって、早く10キロ痩せなさいよ。話はそれから。

弘毅 そんなのいつになるかわからないじゃない。

茂雄 痩せる気あるの？

弘毅 太一がデパ地下の惣菜いつも買ってくるから。

太一 一人分の自炊は大変だから、交替で三人分用意することにしたんでしょ？

茂雄 目的忘れてないよね。食事に気をつけて健康管理するんだよね。

太一 遅くなる日だってあるじゃない。

弘毅 だからって揚げ物ばかり買ってくることはないでしょうよ。

太一 食べなきゃいいでしょ？

弘毅 消費期限が今日中だったら、遅い時間でも食べちゃうじゃない。

太一 はい、じゃあ、これから気をつけます。

太一、行ってしまおう。

弘毅 ちょっと！

茂雄 しょうがないよ。じゃ、二人で行くか。

二人、走り出すが、すぐに歩きに変わる。

茂雄 マスクしながら走るのってきつくない？

弘毅 うん。でも、微妙に人の目が気になるから。

二人、ほとんど立ち止まる。

茂雄 なかなかうまくいかないね。

弘毅 なんだかき、昔はもつと楽しくやれてたよね。

茂雄 何？

弘毅 なんていうか、こういうこと。一緒にご飯食べたり、走ったりとか。

茂雄 年取ったってことじゃない。

弘毅 そうかな。

茂雄 わがままになった。わがままになってもいいと思った。長いつきあいだから。

弘毅 そこをどうにかしたいと思うんだけどね。

茂雄 まずは自分からじゃない。人にきびしく自分にやさしいってよくないから。

弘毅 僕？

茂雄 自覚ないなら、そこから反省する。

茂雄、行ってしまおう。

弘毅 ちょっと待ってよ。みんなと一緒に年取っていくんだよね。

弘毅退場。

場面は変わって、新宿のカフェ。

太一と茂雄が話している。

茂雄 転勤ってどこに？

太一 新潟店。

茂雄 そんなところにあったんだ？

太一 三越は閉店したんだけど、うちはまだあるのよ。実家から通えるし、若干、昇進もするから、思いきって行っちゃおうかなって。

茂雄 お母さんの介護？

太一 遠くから何言ってもだめだから、実家にもどって、なんとか施設に入れたいと思うんだよね。

茂雄 実はさ、転勤の話、うちにもあって。

太一 金井不動産？

茂雄 いろいろあって、今度スタートに吸収されて、あそこ本社千葉じゃない。本社勤務になりそう。

太一 通えないの？

茂雄 世田谷から千葉けっこうあるから。これまで徒歩通勤だったからどうしようかと思って。でも、太一が出てくんなら、考えようかな？ 弘毅一人っていうのはちよっときついだろうから。

太一 たしかに急に一人っていうのもね。

茂雄 うん。

太一 新しい入居者の心当たりないでもないんだけど。

茂雄 誰？

太一 うちの新人、この4月に新卒で入った。

茂雄 ゲイなの？

太一 うん。

溝口裕也が登場。

場面は太一の職場の給湯室。

太一 ああ、溝口くん、来週のハラスメント研修、どうなった？
裕也 ああ、講師の先生と連絡とれて、リモートじゃなく、リアル開催ってことになりました。
太一 よかった。やっぱりZOOMより、ちゃんと会って話聞いた方がいいからね。
裕也 はい。
太一 何してたの？
裕也 湯飲み洗ってました。みんなの分。
太一 だめだって、自分の分は自分で片付けるって決めたんだから。
裕也 でも、流しに置いてあるんで。
太一 ほっといていいから。
裕也 これからはそうします。

太一、周囲を気にして話し出す。

太一 溝口くん、今ちよつといいかな？
裕也 はい、なんですか？
太一 私、カミングアウトしようと思って。
裕也 何をですか？
太一 何をもって、自分がゲイだったことに決まってるでしょ。
裕也 ああ、元々はそういう意味ですもんね。
太一 元々じゃなくて、ずっとそうなの。溝口くん、入社して最初の挨拶で、さらっと自分はゲイだって言ったじゃない。私、びっくりして。
裕也 すみません。
太一 いいのいいの。時代は変わったんだなあってしみじみしちゃって。
裕也 最初の面接のときから言ってたんですけど。みなさん知らなかったみたいでおどろきました。
太一 プライバシーだからね。そのあたりはちゃんとしてるのよ、うち。でも、そうすると何も話せなくて。新人のあなたに相談するのもなんなんだけど。
裕也 あ、それなんですけど。言っただけいいのかな？
太一 何？
裕也 どうしよう。
太一 いいから言いなさい。何なの？
裕也 みんな知ってると思います、清水さんのこと。
太一 え？ 私、話してないのに。
裕也 入社するとき言われたんです。誰とは言えないけれど、ゲイの社員はもういるからって。
太一 誰？
裕也 誰とは言えませんが、横山部長です。
太一 知ってたんだ。え、みんなも？
裕也 はい。だから、あえてしなくてもいいじゃないんですか？
太一 そうなんだ。じゃあ、私のこれまでの苦勞はなんなわけ？

裕也 苦労してたんですか？

太一 そうよ。見てわからない？

裕也 あんまり。

太一 どうしよう。

裕也 みんなが知ってるってことを清水さんが知ってるんだったらそれでいいんじゃないですか？

太一 そうかな？

裕也 そうですよ。じゃあ、僕、売り場にもどります。

太一 あ、行ってらっしゃい。

裕也、退場。

場面は元のカフェ。茂雄が戻ってくる。

太一 どう？ この子なんだけど。

茂雄 おどろいたわ。

太一 ねえ、すっかりしてるのよ。

茂雄 そうじゃなくて、あんたが職場でカミングアウトしてないんだってことに。

太一 なし崩しにしていることになってたみたいだけだね。どう？

茂雄 え、いいんじゃないかな？ ていうか、話はしてみたの？

太一 うん、実家が埼玉の奥の方で無理矢理通ってるんだけど、一人ぐらしたいって言ってるの。うちのこと話したらおもしろそうって。

茂雄 いいじゃん。いいじゃん。若い子でメゾンラゼンも若返る。

太一 世代交代ね。

数日後

賢の部屋。

茂雄、太一、弘毅。

向かい合って座っている。

茂雄 そういうわけで、私たち出ていくことになりました。しばらくの間、弘毅ひとりになっちゃうけど……

太一 いいかな？

弘毅 なんで僕に聞くの？

茂雄 いちおう、大家さんだし。

弘毅 大家さんは出ていくって言われたら、そうですかかって言うしかないじゃない。

太一 じゃあ、友達として相談。どう？

弘毅 そんないいに決まってる。どうぞどうぞ。太一はお母さんの介護、茂雄ちゃんは本社勤務、がんばって。

太一 ありがとう。それでね、新しい入居者んだけど、心当たりがあって、私の職場の若い子なんだけど。

弘毅 あ、そういうのいいから。

太一 いいからって何？

弘毅 新しい人、来てもらわなくていいから。

茂雄 どうして？

弘毅 もうやめようかなと思って。メゾンラセゾン。

茂雄と太一、顔を見あわせる。

茂雄 いいじゃない、ゲイばかりが住んでるアパート。

弘毅 ほんとにそう思ってる？

太一 思ってるわよ。

弘毅 でも、出ていくんでしょ。

太一 だから、それは……

弘毅 太一だって、めんどくさいと思ってるんでしょ。ゲイばかりが住んでるんなら、男連れ込むのに気兼ねしなくていいわって、そう思ってたのに、全然違うって。

太一 昔の話でしょ、今はそんなこと思ってるない。

弘毅 でも、出て行くんでしょ

太一 それが理由じゃないから。

弘毅 またまた……

太一 実家に帰るんだから、今みたいに自由にはできないって。

弘毅 このあたりの出会い系サイトでは顔が売れちゃって、場所を変えて新しい出会いを求めてたりする？ 年齢サバ読むのも限界になったから、新しい場所でリセットしようと思ってる。

太一 そんなことしません。

弘毅 していいんだよ。すればいいじゃない。

太一 しません。

茂雄 弘毅、言い過ぎ。

弘毅 茂雄ちゃんもさ、平谷君の保険金受け取って、どこかにいいマンション買えばいいじゃない。あ、1000万じゃ買えないか。でも、新しい会社で格安のいい物件紹介してもらって、そこに住めば。こんな田舎じみた古くさいアパートじゃなくて、海の近くのタワーマンション、それだっていいんじゃない。うん、すっごいいいと思う。

間

弘毅 となりのケアハウスひまわり。手狭になったんで拡張したいんだって。涉のおやじさんから話があって。元々、うちの土地だったところだけど、今はあの人の病院のもんだから。それに、僕いまケアハウスひまわりで働いてるし、働けなくなったらお世話になるんだと思うし。

茂雄 聞いてない、そんな話。

弘毅 僕も今日聞いたところ。

太一 やだ、そんなことになってるの？ もう、あの時、予定変更するんじゃないかった。あの時、みんなでお金を出し合って、このアパート建て直して、みんなのものってことにし

ておいたら、ずっとここあったのよね。ねえ、今からでも間に合わない？ 私この人と、平谷くんの保険とで、各自の部屋を買い取るから。

弘毅 築30年のアパート買ってどうするの？ 無理しないでいいよ。それに、太一と茂雄ちゃんが死んだらどうなるの？ 誰のものになるの？

太一 それは……

弘毅 僕が死んだら、僕のもは僕の姉貴、涉の母親のもの、姉貴が死んだら涉のもの。どうせそうなるなら、今そうなってもいいんじゃないかと思ってさ。ちよっと早めの終活みたいなものだから。

茂雄 弘毅がそれでいいなら、そうすればいいと思う。

太一 ちよっとあんた……

茂雄 いつ頃の予定？

弘毅 来年の春には始めたいって。

茂雄 平谷くんの一周忌のあとでもいい？

弘毅 れはもちろん。

太一 じゃあ、わかった。でも、ここ出てつても、緊急連絡先はそのままにしておくから。

弘毅 遠くにいるのに意味ないじゃん。いいよ消して、僕も消すから。がんばって、お母さんの介護。

太一 ……言われなくてもやるわよ。

太一、出て行く。

弘毅 茂雄ちゃんも。どうぞ。

茂雄 気が変わった。千葉まで通う。

弘毅 無理しちゃダメだって。もう若くないんだから、

茂雄 平谷くんの一周忌が終わるまではここにいる。

弘毅 パートナーだから？

茂雄 うん。

弘毅 それさ、ほんとなの？ 平谷くん、誰でもよかったんじゃないの？

茂雄 誰でもってどういうこと？

弘毅 だったら、僕や太一にプロポーズしたりする？ もし、僕がOKって言ったら、僕が平谷くんのパートナーになってたわけだよ。

茂雄 それはそうだけど。

弘毅 誰でもよかったんだよ。パートナーになってくれる人なら。保険金受け取ってくれる人なら。何か残らなかったんだよ。誰かに自分のしたこと覚えておいて欲しかったんだよ。さびしくなったんだよ。僕たち一緒に住んでいたのに。友達だと思ってたのに。友達じゃだめなんだってことなんだよ。こんなアパートがあったって、何にもならないってことなんだよ。

間

弘毅 だから、解散。

茂雄 弘毅……

弘毅 出てくとき電気消してって。

弘毅、出て行く。

茂雄、一人残っている。

第五場 冬

十二月中旬の夕方。

メゾンラセゾンの庭。

弘毅が杖をついてやってくる。

老け込んだ印象。

ゆっくりと椅子に座って目の前の樹を見ている。

渉がやってくる。

渉 ヒロちゃん、どうしたの？ だいじょうぶ？

弘毅 平気、平気。ちよっと転んだだけだから。

渉 でも杖ついている。

弘毅 うん、これから先、杖が必要になったときのシミュレーションしてんの。なくても全然平気。ほら。

弘毅 杖なしで歩いてみせる。

渉 心配させないでよ。

弘毅 なに渉のところと連絡がいった？ 大げさなんだから。

渉 ほんとに大丈夫なの？

弘毅 大丈夫。それにね、今日はちよっといいことがあって。

渉 何？

弘毅 ケアマネージャアの試験に合格しました。

渉 おめでとう！ よかったね。

弘毅 これでまたひとつ目標達成。

渉 次は何？

弘毅 十キロ痩せることかな？

渉 それずつと前から言ってるよね。そろそろ真剣に取り組んだ方がいいと思うよ。

弘毅 わかっている。わざわざ来てもらって悪かったね。

渉 それで僕がヒロちゃんの養子になる話なんだけど。――

弘毅 それならもういいから。

渉 でも、このままじゃ親父にいいようにされちゃうよ。

弘毅 勝手に養子縁組したら、それこそどんなことになるかわからないじゃない。

渉 そうだけど、今よりよくない？ 親父むちやなこと言ってるんでしょ？ ケアハウスひまわり、退職させるとか。ゲイの介護士なんていらないうて。

弘毅 だから、とったのケアマネの資格。ケアマネ人不足だし、もしクビになったとしても、よそでやっていけるから。

渉 親父、僕がゲイになったのはヒロちゃんのせいだって思いこんでるから。なったんじゃない。元からそうだっていうのに。

弘毅 まあ、言わせておこう。とにかく、養子縁組の話はなし。これから先、パートナーができたとき、困らないように。

渉 結婚すればいいし。

弘毅 まだできないし、いつになるかわからないから、養子縁組する人いるじゃない。

渉 でも、信じてるんで。パートナーに出会えて、結婚ができる未来を。

弘毅 がんばって。

渉 じゃあ、お酒買ってくるから、お祝いしよう。合格祝い。

弘毅 ノンアルにして。

渉 了解。

渉、出て行く。

弘毅、しばらく立っているが部屋に向かって歩き出す。

剛がやってくる。

剛 ごめんください。

弘毅 平谷さん。今日は何ですか？

剛 田口さんから聞きました。メゾンラゼン、なくなるって。ほんとですか？

弘毅 ええ、まだ先なんですけどね。ゆくゆくは。

剛 賢の部屋、そのままにしてしまってもうしわけないです。あの、家賃、お支払いします。

弘毅 いいですよ。

剛 でも、いろいろ大変なんじゃないですか？ 誰もいなくなっちゃって。

弘毅 あ、他に仕事してるんで大丈夫です。どうぞご心配なく。

剛 そうですか。

剛、腰をおろす。

弘毅 平谷さん？

剛 仲が悪かったんです。

弘毅 は？

剛 賢と私です。

弘毅 そうなんですか。

剛 聞いてませんか？

弘毅 ええ。

剛 話すこともないってことですかね。ずっとうらんでたんですよ。賢のこと。

弘毅 え？

剛 子どもの頃はごく普通の兄弟だったんです。それが、賢が先に結婚して、子どももできず、そのあとで自分はゲイだって言っただけで離婚して。私はこのトシまで独身なんです。賢が家を出てから、ずっと親せきにも近所から言われて、平谷さんとこの剛ちゃんはおカマなんじゃないのって。だから、賢にカミングアウトですか、されたときには、頭に来てしまっただけ。私以上に両親が怒って、それでも私はなだめることはしませんでした。それでずっと疎遠になって。そのままに。

弘毅 そうだったんですか。

剛 もっと腹が立ったのは、賢がゲイだってわかって、私のうわさがなくなったわけじゃないんです。二人ともなのって、やっぱり。許せないと思っただけ。だから、ずっと会うこともなくて、死んだって連絡をもらったときも。やれやれと思っただけ。ゲイばかりが住んでるアパートに住んでるって、なんですかそれ。東京で楽しくお氣樂にやってるいい身分だなんて思ってたんです。すみません。

弘毅 いろいろいんですよ。

剛 でも、こちらに何度か邪魔するうちに、そういうことじゃないんだなって思いました。もっと話しておけばよかった。

弘毅 賢さんも同じ気持ちじゃないですか？

剛 そうですかね。

弘毅 そうですよ。

剛 すみません、こんなこと話して。誰にも話したことなくて。誰もいないんですよ、私には。賢にはいたんですね、みなさんが。また伺ってもいいですか。

弘毅 もちろん。

剛 じゃあ、また。ちょっと早いですけど、よいお年を。

弘毅 よいお年を。

剛、出て行く。

風が吹いて樹を揺らす。

裕也がやってくる。

弘毅 おかえり涉。え、誰？

裕也 あの、ここメゾンラゼンですよ。

弘毅 そうですけど何か？

裕也 よかった。部屋の内見させてもらっていいですか？

弘毅 金井不動産から見えたんですね。もう募集はしてないですよ。社長さん、ぼけちゃってます。

裕也 それは聞いてるんですけど。でも、見たいんです。

弘毅 すみませんね。お帰りください。

裕也 あの、うそでした。清水太一さんから聞いて。

弘毅 は？

裕也 同じ職場で。

弘毅 太一の？

裕也 清水さん、今は新鴻店ですけど、僕は新宿で。こういうアパートがあるから住んでみないかって、急に何部屋も空くからって。

弘毅 それも断ってほしいって伝えただけ。

裕也 時間があつたら行つてごらんで言われたんで来ました。

弘毅 お断りします。

裕也 ええ！

弘毅 ええじゃなくて。いいから帰つて。

裕也 せっかく来たんでゆつくりしてつていいですか？

弘毅 ああね……

裕也 亡くなった人の部屋、誰が見てもいいように開けてあるつて。お邪魔してもいいですか？

弘毅 それもうやめたの。

裕也 開けてください。

問

裕也 あ、溝口裕也つていいいます。二十三歳。職場ではカミングアウトしてます。大学からサークルやつてたんで。就職の面接のときもカミングアウトして。それで清水さんの後輩に。

弘毅 それは素敵。

裕也 清水さんからこの話きいたんですけど、ちょっとわからないことがあつて。

弘毅 何？

裕也 なんで始めたんですか？ ゲイばかりが住むアパート。

弘毅 聞いてないの、太一から？

裕也 はい。

弘毅 そつか、太一も知らないのか。

裕也 教えてください。

弘毅 長い話になるけどいい？ 年寄りの昔話だよ。

裕也 平気です。

問

弘毅 このアパート、僕は父親から相続したんだよね。若い頃ずつとふらふらしてたから、せめてもつてかんで、僕に残してくれた。

本当の両親じゃないんだ。男の子がほしくて養子にとつたんだつて。孫の顔が見たかつたんじゃない。だからゲイだつてカミングアウトしたら大騒ぎ、血がつながつてないつてこともそのとき初めて聞かされて。威張つてカミングアウトしたら、やられたつてかんで。そんなことがあつたから、両親が事故で死んじゃったとき、もう関係ないつてことにしようかと思つたんだよね。でも、やめたんだ。僕のために残してくれたものなんだから大事にしようつて。それで、ずっと大家さん。ゲイばかりのアパートにしようつてい

うのは思いつき。そういうのあったらいいなって。90年代。思いついたんだよね。そういうのあったら楽しいなって。いやなこといっぱいあったから。男二人で部屋借りに行ったら、ひどい対応されたり、カミングアウトしたら「エイズなの？」って言われるような時代。だから、いやな思いをしなくていい場所になるといいなって。知り合いのくちこみで入居者集めてさ。一人はそのときつきあってた相手なだけ。みんな、ただ住んでるだけなのに、毎日が楽しかった。旅行にも行ったし、この庭でいろんなことして遊んでた。おかしなこといっぱいあって。ゲイの入居者って決めてるのに、どういうわけか女の子が来ちゃったり。付き合ってたあいてに捨てられた子が、手切れ金代わりの家賃半年分で転がり込んだり。クリスマスツリーの飾り付けをこの樹にしたら、イルミネーション点灯したとたんにブレーカーが落ちて、このあたり一帯が停電して大騒ぎになったり、モー娘。の衣装みんなでつくって、振り覚えて、ここで踊ったら、うるさいって怒鳴り込まれたり。家族と縁遠い人が多くって、僕もそうだけど、ここにいるとなんだかうれしくて。ほっとして。家族じゃないけど、家族みたいなものがここにはあったんだよね。うん、あった。過去形だけだった。

間

弘毅　なが！　おしまい。

裕也　「つづく」じゃないんですか？

弘毅　うん。おしまい。

裕也　もつたないいな。おもしろいじゃないですか、ゲイばかりのアパート。

弘毅　……。

裕也　あの、引っ越してきていいですか？　ここに住んでみたいです。パートナーと二人で。

部屋借りるの大変で。あ、別々でいいんです。その方がかえっていいのかもしれないし。

だめですか？

弘毅　……。

裕也　だめですか？

間

弘毅　ごめんね。それじゃ。

弘毅、出て行く。

裕也、しばらく立っているが退場する。

第六場　春・エピローグ

翌年の4月。

庭。

太一がサングラスと日傘で椅子にすわっている。

弘毅がやってくる。

二人ともマスクはしていない。

弘毅 太一？
太一 早く着いたから。暑いわね。
弘毅 それ（サングラスと日傘）いる？
太一 春の紫外線はばかにできないんだって。でも、いい天気でよかったわね、平谷くんの一
周忌のパーティ。パーティは変か？
弘毅 変じゃない。みんなで楽しくあつまるから。
太一 コロナも落ちついたし。
弘毅 理彦も来るって。
太一 アメリカから？
弘毅 渉が迎えに行ってる。

間

弘毅 元気？
太一 まあね。
弘毅 お母さんは？
太一 もう聞いて。ようやく施設に入ったのよ。一面倒見てた叔母と一緒に。
弘毅 一緒に？
太一 元々老々介護だったんだけど、限界だったみたい。たおれちゃって。誰が金出すんだっ
て話になって、私が出すわよ、二人分って言ったら、あっさり解決。
弘毅 二人分って大変じゃないの？
太一 まあ覚悟はしてたから。二人分は予想外だったけど。ケアマネジャー合格したんだっ
て。ちよつと相談のつて。
弘毅 うん。

茂雄と剛がやってくる。

弘毅 平谷さん。
剛 今日は、どうもありがとうございます。いろいろご面倒をおかけして。
弘毅 勝手にやってるんで、気にしないでください。天気もいいし、予定より大勢になったん
で、ここでやることにしました。
剛 賢の同僚の先生たちも見えるそうですね。
弘毅 賢さんの友達も大勢。
剛 よろしくお願いします。
弘毅 はい。（茂雄に）ひさしぶり。
茂雄 うん。忙しい？
弘毅 おかげさまで。
太一 何よそゆきの会話してんのよ。それより、翔太くん、どうなった？
弘毅 翔太くん？

太一 平谷くんの子ども。二人して会いに行っただんでしょ？

弘毅 なんて？

剛 相続放棄の取り消しを頼みに。

弘毅 取り消しって、できるの？

茂雄 できる。本人の了解なしにお母さんが手続きしてたんだって。それに間違った情報を元に放棄したってことだから、債務がないのにあると思います。

剛 田口さんに言われて、私もぜひそうしたいと思いました。賢のためにも。

茂雄 お兄さんに連絡とってもらって、会うことになった。名古屋駅地下街の喫茶店。

茂雄と剛は正面を向いて椅子に座る。

手前（客席側）に翔太がいる。

太一 どんな子？ 平谷くんに似てる？

茂雄 おもかげはあるけど、母親似かな？ 大学三年生。背が高く細身。髪は今風な短めのツーブロック。就職活動始めてるんだって。

剛（紹介する）お父さんのパートナーの田口茂雄さん。

太一 言っただけ？

剛（太一に）はい。全部話そうと思ったんで。

弘毅 反応は？

茂雄 おどろいてた。

剛（翔太に）相続放棄、取り消してくれないかな？ お父さんに債務はないし、相続税もかからない。そうしたら、こう言った。「いいんですか、僕がもらっちゃって？」

茂雄 うん。僕は相続できないんだ。パートナーシップ宣誓してるんだけどね。

剛 「なんだかすみません。」

茂雄 あやまることない。

剛 そうしたらこう言った。「よかったです。父は一人じゃなかったんですね。」

茂雄 もちろん。

剛 それじゃあ、取り消します。

茂雄 ありがとう。

剛 その後、名古屋にいる田口さんの知り合いの弁護士さんに手続きをお願いしました。家庭裁判所から連絡があつて、無事受理されたそうです。

太一 よかった。

弘毅 平谷くんの遺産は、茂雄ちゃんと翔太くんで半分ずつか。

茂雄 それが違うんだよね。保険会社に連絡したら、虚偽の申告をされているので支払えないって。

弘毅 今になってそんなこと言うの？

茂雄 だったら、元の受け取り人、翔太くんに戻せないかっていったらそれもできないって。

太一 どういうこと？

剛 弁護士さんにおねがいして交渉中です。納得できませんからね。

裕也がやってくる。

裕也 どうも。

太一 溝口くん、ひさしぶり。元気にしてる？

裕也 はい。清水さん、新潟からですか？

太一 うん。明日、新宿に顔出すから。

裕也 待ってます。（剛を見て）平谷先生？

剛 は？

裕也 あ、すみません。人違いでした。でも、よく似てる。

弘毅 人違いって、誰と間違えたの？

裕也 高校の担任の先生です。僕がまだカミングアウトしてない頃、悩んでたら、言ってくれたんです。好きなように生きていいんだよ。自分のやりかたで。きみはひとりじゃないって。それで、僕、がんばれたんです。

剛 賢がですか？

裕也 はい。平谷賢先生です。

剛 私の弟です。

裕也 よろしくお伝え下さい。

剛 今日は賢の一周忌のパーティなんですよ。

裕也 そうだったんですか。

茂雄 平谷くん、そんなことしてたんだ。

太一 やるわね。

裕也 平谷先生、ここに住んでたんですね。

弘毅 うん、住んでた。

裕也 あの、やっぱり引越してきちやだめですか？ パートナーと別れて今一人なんですけど。

弘毅 ごめんね、それはできない。

裕也 お願いします。

弘毅 だめなの。ここシェルターになるから。

太一 シェルター？

弘毅 虐待されたり、いろんな事情で自立できないLGBTQのためのシェルター。渉が区役所に相談してくれて、となりの拡張に応じるより、そっちの方がいいかって。僕は、引き続き、管理人としてここに住むことになったから。

太一 建物もそのまま？

弘毅 ちょっと改築はするんだけどね。だから、メゾンラセゾンはずっとある。

問

太一 悪くないかも。シェルター。

茂雄 たしかに。

太一 少しのんびりしない？ まだ時間あるわよね。一休みしましょう。よかったわ、いい天

気で。

茂雄 あんた何もしてないじゃない。

風が吹いて樹を揺らす。

裕也 この樹なんの樹ですか？

太一 さあ、前からずっと気になってるんだけど。

裕也、スマホで調べようとする。

弘毅 ああ、だめ。調べないで。謎のままでもいいから。

太一 花が咲くわけじゃないし、葉っぱが紅葉するわけでもないし。特徴がないっていうか、役に立たないっていうか。

弘毅 たしかに変だよな。子供の頃からずっと見てるけど、ずっとこのまんまだった気がする。あれ、少しは大きくなってるのかな？

太一 ねえ、この木の目的は何なわけ？

茂雄 何よ、目的って。

太一 だって、花も咲かない、実もつけないって何のために立ってるんのよ？

裕也 雄の木じゃないですか？ ほら、木って、雄の木と雌の木ってあるから。

太一 でも、それだって、花咲くんじやないの？ 雄なりに。

茂雄 咲かないのよ、あんたと一緒よ。

太一 私はちゃんと咲いてます。

茂雄 ただ枯れないでいるってかんじよね。

太一 ほっというてちようだい。

弘毅 この樹はずっとここにおいて、全部見てるんだね。

剛 そして、私たちよりずっと長く生き続ける。

太一 くやしいから、切り倒してもらおう？

茂雄 やめなさいって。

弘毅 ねえ、しりとりしない？ 昔やったみたいに。

剛 しりとりですか？

弘毅 でも、木の名前しか言っちゃいけないの。

裕也 木の名前って……

茂雄 いいよ、やってみよう。

しりとりが始まる。かつてそこで行われていたように。

弘毅 じゃあね、モミ。

剛 ミカン。

太一 ブーツ。

剛 ミのつく木なんてありますか？

裕也 ミカンのキ。

剛 そういうのありなんですか？

弘毅 あり、あり。

太一 じゃあ、やりなおし。

剛 ミカンのキ。

茂雄 キリ。

太一 リラ。

裕也 ライラック。

太一 リラとライラックは同じよ。

裕也 いいじゃん。ライラック。

弘毅 クリ。

剛 リンゴのキ。

裕也 キンカン。あ……

太一 このしりとりには無理があるわ。もうやめない？

弘毅 じゃ、しりとりじゃなくて、古今東西、木の名前？

茂雄 そうね。それならいいかも。

弘毅 じゃあ、行くよ。古今東西、木の名前。シラカバ。

剛 フジ。

茂雄 マツ。

太一 スギ。

裕也 ナラ。

弘毅 ポプラ。

剛 イチョウ。

茂雄 ブナ。

太一 シイノキ。

裕也 カエデ。

弘毅 サクラ。

剛 八重桜。

茂雄 枝垂れ桜。

太一 カキ。

裕也 ビワ。

弘毅 ケヤキ。

剛 アスナロ。

茂雄 プラタナス。

太一 クスノキ。

裕也 ヒノキ。

弘毅 (遠くを見て) あ、渉！

みんな弘毅が見ている方を見る。

太一 やだ、となりにいるの理彦？
茂雄 すごい、育ってる。
弘毅 おかえり！

一同、やってくる渉と理彦を見ている。

幕

*

*

*

劇団フライングステージ第48回公演

Four Seasons 四季 2022

2022年11月2日～6日 下北沢OFF・OFFシアター

平谷 賢	……	中寫 聡
相庭弘毅	……	関根信一
清水太一	……	石関 準
田口茂雄	……	岸本啓孝
二階堂渉	……	井手麻渡
平谷 剛	……	中寫 聡
溝口裕也	……	井手麻渡

作・演出 関根信一

照明 伊藤馨

音響 樋口亜弓

衣裳 石関 準

舞台監督 岸本啓孝、水月アキラ

フライヤーイラスト ぢるぢる

フライヤーデザイン 石原 燃

制作 渡辺智也、三枝 黎

協力 M・M・P OVER TONE` YagiRock` CoRich 舞台芸術！

企画製作 劇団フライングステージ